

2020年2月9日 礼拝説教要旨

詩編講解説教2 「あなたはわたしの子」

詩編2：1～12、使徒言行録13：33

先週から詩編の講解説教を始めました。これから詩編を読んでいく上で特に留意したい点をここで少し触れておきたいと思います。第一点は、これはどの説教でも同じことですが、イエス・キリストの福音を語るという点です。ただ詩編は旧約聖書ですからキリスト以前の時代であって、もちろんイエス・キリストは一切登場してきません。でも例えば今日の第二編などは、王の即位のことが語られていますが、この王はイエス・キリストを指しているという解釈が古代教会の時代からなされており、キリストが登場していなくてもキリストを雄弁に語ります。

もう一つ大事にしたい点があります。宗教改革者のカルヴァンは詩編の注解書を書いています。これを読みますと、例えば今日の第二編はもちろん王としてのキリストが語られるのですが、同時にダビデのことも語られます。実際にこの第二編で登場してくる王というのは、イスラエルの王ダビデのことを指していると捉えることができます。カルヴァンはこの第二編を読む時に何よりダビデの立場を大事にしているように思います。確かにわたしたちはキリストを中心に読むのですが、しかし一気に歴史を飛び越えて、いきなりキリストに結びつけるがゆえに、この詩編を歌った人々の苦しみや嘆き、罪の現実を素通りするわけにはいかないと思うのです。この詩編を読むわたしたちは、ここでダビデと自分を重ね合わせるのです。ダビデの苦しみ、ダビデの罪、敗北、そして勝利、希望がわたしたちの苦しみであり、わたしたちの罪、敗北であり、そしてわたしたちの勝利と希望に結びついていく時に、初めてわたしたちは詩編を福音として読むことができるのではないのでしょうか。

この詩編注解の序文でカルヴァンは言います。「わたしはこの書物を魂の解剖図と呼ぶのを常として来た。何故ならば、あたかも鏡に写すようにその中に描写されていない人間の情念は、一つも存在しないからである。そこにおいて聖霊はあらゆる苦悩、悲哀、恐れ、疑い、望み、慰め、惑い、そればかりか人間の魂を常に揺り動かす気持ちの乱れを生々と描き出している」この魂の深みに分け入ることで実はキリストの救いが見えてくる。その時にこのダビデが、そしてそこに重ね合わせるわたしたちがキリストで満たされるのです。このことがこれから詩編を読む上で大切にしたい第二点目です。キリストを中心に語りつつも、そこに表されている人間の魂の叫びのような部分が見えてくるような、そういう説教を心がけたいと思います。

第二編は「王の詩編」と呼ばれるもので、6節にあるように王の即位が語られています。そして具体的にはこの王はダビデを指していると言われます。2節に「主の油注がれた方」とありますが、この「油注がれた者」という言葉がヘブライ語でマーシアッハ、つまりメシア、ギリシア語でキリストです。そのことゆえに第二編は、イエス・キリストを指し示しているということで新約聖書に多く引用されています。あわせて読みました使徒言行録にも4章、13章で引用されていますし、他にもIコリント15章、ヘブライ書、黙示録にも引用が見られます。何より7節の「お前はわたしの子」という部分ですが、これは福音書が伝える主イエスの洗礼の場面で、天が開いて「これはわたしの愛する子」という声が聞こえたところがあります。そこに通じていると言われます。ですから詩編の中でも比較的イエス・キリストの福音がよく見えてくるころだと言えます。

この「油注ぐ」という行為は任職の行為でして、それは神さまから特別に務めを託されることです。油を注がれたダビデは、その後、王となりイスラエルを治めます。でもこれは簡単な道のりではありませんでした。ダビデの前にはサウルという王がおりました。サウルもまた油を注がれ神さまに召された王でした。しかし御言葉に従わず罪を犯します。そこで神さまはサウルからダビデへと王を交替させるのです。当然サウルは面白くありません。ダビデの存在を疎ましく思ってダビデを苦しめます。そしてそれはやがて殺意へと変わるのです。

この王の即位の歌の背景には、王、支配者が代わることで生じるわたしたち人間の様々な感情の動きが示されていると読むことができます。例えばそこではサウルのダビデに対する嫉妬、拒絶のようなものを考えることができますでしょう。王の即位を喜ぶのではない。新しい王を歓迎していないのです。これまで自分が王であり自分が中心だった。けれどもその時代が終わる。それはわたしたちにしてみれば新しい王、キリストを迎えることでもあります。真の神さまを神さまとすることです。でもわたしたちはそれを喜びません。むしろ神さまを排除しようとする。どこまでも自分が王の座にしがみつこうとするのです。あのクリスマス話でヘロデがキリストを排除しようとして二歳以下の男の子を殺した話を思い出します。その殺意がやがてキリストを十字架へと追いやったのは言うまでもありません。そのようにわたしたちは神さまのご支配を嫌い、これを避けるのです。

でも新しい王の即位、神さまのご支配を喜ばない罪からわたしたちは救われるのです。キリストはご自身の命と共にわたしたちの罪を十字架で打ち砕いてくださいました。それが9節に記されます。「お前は鉄の杖で彼らを打ち、陶工が器を砕くように砕く」罪に支配された自分が打ち砕かれて死ぬ。「わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられた」（ローマ6：6）とパウロも言います。でもそれだけではない。新しい人がよみがえる。「主はわたしに告げられた。お前はわたしの子、今日、わたしはお前を生んだ」（7節）と。

この詩編はダビデ自身の再生の歌でもあります。彼自身が新しく生まれなければならなかった。おそらくこれから詩編を読む中で数え切れないほど話をするようになりますが、ダビデ自身が神さまの御前に大きな罪を犯しました。王という自分の立場を利用して部下ウリヤを殺し、その妻バトシェバを奪ったのです。その負い目がいつも彼にありました。ちなみに詩編の中には悔い改めの詩編と呼ばれるものが7つあります。6、32、38、51、102、130、143。詩編を読むときに、わたしたちはダビデの罪と向き合う。それはわたしたちの罪と向き合うことです。

しかし同時に、この罪を赦し、それでも愛してくださる神さまの深い愛を知る時に、わたしたちは新しくやり直すことができます。ダビデに対して神さまは言われました。「お前はわたしの子、今日、わたしはお前を生んだ」罪深いダビデ、それでも「お前はわたしの子」だと言われる。そこに救いがあるのではないのでしょうか。そこに慰めがあるのではないのでしょうか。パウロも「あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです」（ガラテヤ3：26）と記します。わたしたちもまた神の子として新しく生まれたのです。神さまはそのようにわたしたちを子として扱ってくださる。イエス・キリストによって「お前はわたしの子だ」と言ってくださる。もしわたしたちが罪から目覚めて、新しくやり直すことができるとすれば、それはこの神さまの無限の愛と赦しに包まれて生きる時なのです。